多地点接続による道徳遠隔授業の意義と計画

Moral Distance Learning by Multi Point Communication :
Implications and Methods

上薗恒太郎、増田祥子、山本和佳、藤木卓、中村千秋、森田裕介、内野成美、
真方浩志、加藤哲、西川誠二、佐藤良平、長瀬洋一、相田悦子

Kotaro KAMIZONO, Sachiko MASUDA, Kazuyoshi YAMAMOTO, Takashi FUJIKI,
Chiaki NAKAMURA, Yusuke MORITA, Narumi UCHINO, Hiroshi MAGATA,
Tetsu KATO, Seiji NISHIKAWA, Ryohei SATO, Yoichi NAGASE, Etsuko SOUDA

Ⅰ　はじめに

2002年2月1日（金）に、長崎県対馬の豆酘小学校および瀬分校、長崎県大村の竹松小学校、鹿児島県種子島の茎南小学校の４校、３地点を結んで道徳遠隔授業を実施した。本稿では、多地点接続による道徳遠隔授業の意義とその計画、すなわち機器構成、グループエンカウンターの計画、指導案について述べる。本授業は「赤米でつなぐ道徳遠隔授業」として公表したもので、赤米という希有な授業素材を取り上げている点で特色があるばかりでなく、遠隔教育機器を利用しての授業として先進的であり、遠隔授業には不向きとされがちな道徳授業にとりくみ、交流にとどまらない授業として意義をもっている。

Ⅱ　赤米でつなぐ道徳遠隔授業の意義

この授業は大きく以下の４点、そのほか授業のやり方として３点、技術上のねらいとして３点の特色がある。

（全体の特色）

1．多地点接続による道徳遠隔授業である
2．グループエンカウンターを遠隔授業によって実施する
3．赤米という注目される授業素材を使い、赤米館という博物館を授業の場とする
4．携帯電話を授業に持ち込み、個のコミュニケーションを重視し、子どもたち一人ひとりを活かす方策とする

（授業として）

5．授業に第３者評価を導入してのティーム・ティーチングによる授業である
6．連想調査法という授業評価方法を使って１時間の授業の成果を見る
7．５・６年生合同の、本校･分校合同の授業である

（技術面で）

8．都市部から離れた学校にとって情報格差是正は、教育活動の活性化にとって必須であり、地域にとっても、地域興しや過疎化への歯止めとして重要であり、これを多地点接続として実現しようとする

9．携帯電話を用いた個のコミュニケーションを重視し、子ども同士の個別の遠隔地での対話促進を目的とするシステムをねらった

10．複数の提示画面を用い、傘マイクを使うなど、臨場感の向上を目的としたシステムを構築した

全国に3カ所しかない赤米継承地は、地域の誇りであるだけでなく日本にとっても貴重で、豆酘の赤米は国の無形民族文化財に指定されることが決まり、種子島は赤米館を建設して町おこしを図っている。大村はまた黒田五寸にんじんなど郷土に誇る産物をもっている。本授業は、こうした郷土を代表するものを介して郷土について思いを深くし、2002年4月からの新学習指導要領における生命尊重の方向となった、自分たちのあり方生き方につなげ、総合的な学習の時間につなげる授業としておこなわれる授業である。

遠隔教育システムを組むにあたっても、授業の必要から組まれた。われわれは、例えば1999年に長崎県五島の奥浦小学校と福岡県姫春小学校を結んだ道徳遠隔授業を複数画面を用いた授業としておこなったが、その際と比べて、グループエンカウンターや携帯電話など新しい試みをおこなう。授業に先立って、今日いじめなどの対応策の一つとして注目され、教育実践に取り入れられてきているグループエンカウンターを遠隔で実施する試みは目新しく、授業のなかで携帯電話を使って小グループで対話する試みも新鮮といえる。

参加する子どもたちは、豆酘小学校5，6年生17名、豆酘小学校瀬分校5，6年生5名、茎南小学校5，6年生18名（授業当日転校してくる児童があったため19名になった）、竹松小学校6年生31名。

2002年2月1日は、午前11時から3地点を結んでグループエンカウンターをおこない、互いの交流を図り、昼食後、13時から14時まで、道徳遠隔授業をおこなう予定を組んだ。

本授業の意義について以下、より詳しく述べる。

1．困難と思われがちな道徳授業を遠隔形式で成立させ、遠隔授業の可能性を広げる。
　(1) 全体として一つの授業を、交流を越えておこなう
　(2) 郷土愛を軸にして、複数の価値を視野に入れた道徳授業である

2．多地点接続の遠隔授業システムを組む。すなわち3地点を結ぶ遠隔授業である
　(1) 総合司会（授業進行を担う授業者）を授業実施2校と離れた地点に置く
　(2) 相互に授業をおこなう校に対して、第3者としての1校を加え、2校の共通性を際だたせるとともに第3者評価の役割をもつ
　(3) 遠隔形式による情報の拡大を、子どもたちの思考や心情の深化につなげる

3．携帯電話により、これまで以上に一人ひとりを活かす場面を授業に設ける

4．グループエンカウンターを、交流する当事者2校と離れた地点からおこない、遠隔によるグループエンカウンターの有効性を確かめる。個別の交流を携帯電話を使って、グループとしておこなう

5．各教室2画面を設置しプロジェクターで画像を大写しにするとともに、傘マイクによる雰囲気の集音によって、子どもたち同士の交流を授業中に保つ

6．地域に伝承された素材（赤米、五寸にんじん）を扱い、伝承する人を取り上げ、郷土の歴史性を背景にして自分のあり方生き方を考える道徳授業として、学習指導要領の新しい流れに沿った授業をおこなう

7．異学年による、合同による授業であり、授業がそのまま学年交流、本校分校交流

の場となる。また教員にとっても、遠隔によるティームティーチングの場であり、未来志向の授業実践の機会となる。

8．授業評価を、通常の評価に加えて、連想調査、エンカウンターふり返り調査、質問紙による技術面の調査など、工夫する

9．容易に総合的な学習の時間につながる授業である

全体としてこの道徳遠隔授業は、赤米という、日本人の主食でありながら一般には思い起こされることのない歴史を伝える素材をとりあげ、子どもたちにとっての郷土愛を考える機会として貴重だといえる。こうした道徳遠隔授業を体験して、眼を輝かす子どもたちの姿に接することができれば幸いだという願いによって全員が努力を重ねた。

Ⅲ　多地点接続による道徳遠隔授業全体構想

1．参加

厳原町立豆酘小学校ならびに瀬分校

南種子町立茎南小学校

大村市立竹松小学校

（協力）株式会社ＮＴＴドコモ九州

その他

対象学年：５，６年生

豆酘小学校５，６年生	17名
豆酘小学校瀬分校５，６年生	5名
茎南小学校５，６年生	19名
竹松小学校６年生	31名

2．日程

2002年1月30日（水）　午後から機器設置開始

2002年1月31日（木）

・場所

対馬　厳原町立豆酘小（教室）

種子島　南種子町立茎南小（赤米館）

大村　大村市立竹松小（教室）

・機器設置及び最終チェック　～１５：３０

・授業最終打ち合わせ　１５：３０～１８：３０（１８０分）

（遠隔教育システムにより３校を結ぶ）

2002年2月1日（金）

・連想調査（１回目）　１１：００～

・エンカウンター（担当：臨床心理士　内野）　１１：０５～１１：４５（４０分）

・ふり返りシート

・コミュニケーション（担当：大村　相田）　１１：５０～１２：１０（２０分）

・給食（各担任）　１２：１０～１２：５５（４５分）

・連想調査（第２回）

・道徳遠隔授業（担当：総合司会　山本）　１３：００～１４：００（６０分）

・ 連想調査（第３回）、遠隔教育機器に関する調査

３．スタッフ一覧

上薗恒太郎（長崎大学教育学部教授）
藤木　卓　（長崎大学教育学部助教授）
中村　千秋（長崎大学教育学部助教授）
森田　裕介（長崎大学教育学部講師）
内野　成美（長崎大学教育学部教育相談室カウンセラー）
山本　和佳（長崎県大村市立竹松小学校教諭）
相田　悦子（長崎県大村市立竹松小学校教諭）
西川　誠二（長崎県厳原町立豆酘小学校教諭）
佐藤　良平（長崎県厳原町立豆酘小学校瀬分校教諭）
藤田　智子（長崎県厳原町立豆酘小学校教諭）
長瀬　陽一（長崎県厳原町立豆酘小学校教諭）
真方　浩志（鹿児島県南種子町立茎南小学校教諭）
加藤　哲　（鹿児島県南種子町立茎南小学校教諭）
増田　祥子（長崎県時津町立時津小学校教諭）

Ⅳ　赤米でつなぐ道徳遠隔授業指導案

2002年２月１日（金）１３：００～１４：００

学校名 学年	大村市立 竹松小 ６年	厳原町立 豆酘小・瀬分校 ５・６年	南種子町立 茎南小 ５・６年
場所	教室	教室	赤米館
指導者	山本和佳	西川誠二	真方浩志
児童	３１名	２２名	１９名
小学校 スタッフ	相田悦子	長瀬陽一 佐藤良平 藤田智子	加藤　哲
長大 スタッフ	中村千秋 内野成美	藤木　卓	上薗恒太郎 森田裕介 増田祥子

１．主題

「今　ここに　わたし　～生き方～」（郷土愛・畏敬の念・生命尊重）

本授業は、長崎県対馬の豆酘小学校及び瀬分校の５・６年生22名、鹿児島県種子島の茎南小学校５・６年生19名、大村市竹松小学校の６年生31名の３地点をインターネットによる遠隔教育システムおよび携帯電話で結び、一つの道徳授業として構成される。

2．主題観

(1)地域および児童の実態

＜位置＞

長崎県対馬は九州最北端にあり、本土から 132km、韓国釜山までわずかに 49.5km という国境の島である。豆酘小及び瀬分校のある厳原町豆酘は対馬の最南端に位置する。古来より大陸との中継地として重要な役割を果たし、日本文化のルーツを知る歴史遺産も豊富である。

一方、鹿児島県種子島は、九州最南端の佐多岬から南西約 40km にある細長い島である。茎南小のある南種子町は種子島の南端に位置する。1543 年にポルトガル人が鉄砲を伝えた地、宇宙開発事業団の宇宙センターの所在地として有名であり、歴史と未来の町である。

長崎県大村は九州の西の果て長崎県のほぼ中央に位置し、波静かな「琴の海」大村湾に世界初の海上空港を持つ長崎県の中核都市である。日本で最初のキリシタン大名大村純忠(第 18 代領主)、天正遣欧少年使節のヨーロッパ派遣など千年の歴史が息づく城下町である。

＜遠隔授業＞

全国でも多くの島嶼部をかかえた長崎、鹿児島では特に遠隔授業の必要性が高い。島の小さな学校での授業は、少人数教育のよさ、密な人間関係に支えられた気心通う暖かさがある。この少人数教育のよさを活かすには、情報の拡大、知らない人たちとの意見交換が望まれる。遠隔授業は小さくまとまりがちな授業に多様性を取り入れ、思考の拡大をはかる方法として島嶼部の子どもたちの視野を広げ、感覚を新たにし、豊かな心を形成するために有効である。

われわれはこれまで「長崎県今里中学校－鶏知を結んだ授業」、「長崎-神戸-シーボルト記念館を結んだ遠隔授業実験」、「五島－国見を結んだ道徳遠隔授業」「奥浦（長崎）－姫治（福岡）間の道徳遠隔授業」をおこなってきた[1]。それぞれ、遠隔地の子どもたちが比較や共感をもとに意見交換しながら、郷土に対する感覚を新たにし、視野を広げることができた。これまでの経験から、遠隔授業に対する子どもの興味関心は高く、集中し感動を呼ぶ授業であったことが伺えた。

反面、遠隔授業が地域紹介や発表の場だととらえられ、一体となった一つの授業となりにくい点があり、また優劣を明らかにしてしまう面が見られた。道徳授業においては、教師による日常の取り組みの差が大きく、授業としての共通基盤を得るまでに長い検討時間を要する点があった。しかしこの努力は、教師の道徳についての授業実践の力を向上させるという成果も大きいことを意味した。

今回の道徳遠隔授業では、地域と赤米の関係に焦点を当てるのではなく、自分と赤米への思いを取り上げながら、学校の枠を越えた一つの授業、赤米の伝統が地域にない第 3 者からの評価、見ている子どもたちからの評価を取り入れた授業を、個のコミュニケーションを大切にしながら進めるように構成した。

＜レディネス＞

小学校５，６年生は社会的な認識能力が芽生える時期であり、本授業実施の３学期にもなると社会的な発言や思考ができると思われる。これは他者との意見交換をおこない、社会的に自己の位置を見つめる道徳性の基礎になる。６年生の社会科では中国や朝鮮半島との交流の中継地としての対馬や、種子島の鉄砲の伝来について学習する。また、５年生にあっては歴史への準備段階として、地域の歴史ある素材をとりあげる授業はふさわしい。歴史をもつ地域の独自性を、他と比較することによって深く認識することができる。さらに歴史的に考えることは、大きなスケールの中に自分が存在することに気付き、自分の未来を考えることにつながる。卒業を控え巣立っていく６年生、小学校最高学年を目前にし見送る５年生にとって、２月に遠隔授業を実施することは、自己を見つめ、人間としての在り方や生き方を見つめなおすために適切な時期である。

豆酘小学校及び瀬分校においては、本校と分校との交流、中学校へ進学する前の共同学習という点からもいっしょに学ぶことが意義深い。

豆酘小と茎南小の子どもたちは、赤米を継承する場が校区にあり、無意識にせよ赤米を隣に生活している。総合的な学習の時間における学習の一環として赤米にふれている子どももいる。

竹松小は総合的な学習の時間の研究を、平成 12・13 年度大村市教育委員会指定を受け「生きる力を育てる総合的な学習の時間をめざして～探求心にめざめる出会いの場を工夫して～」というテーマで進めてきた。５年生は地域学習の一つとして大村を発祥地とする黒田五寸人参について学習しており、赤米にならぶ誇るべき産物を知っている。３校共々、地域に特産物を有するという点では共通している。他地域の産物を介して、地域、歴史、人について考える活動は、視野を広げて自分たちをふりかえるために有効である。言い換えれば、竹松の子どもたちにとって、本授業全体が比較するための授業素材を提示することとなる。黒田五寸人参と自分たちの郷土についてふりかえることにより、新たな視点から総合的な学習の時間につなげることができる。

以下、各校から送られてきた児童の実態である。

＜豆酘小学校及び瀬分校の実態＞

豆酘小学校の児童は、今年度赤米の田植えをおこなうことができた。そこで６年生・５年生は総合的な学習の時間で赤米について、校内に水田を、５年生は発泡スチロール水田を作り、赤米を育てながら調べる計画を立てた。そのため赤米に関する認識はある。しかし、赤米は豆酘地区 3 軒の「頭」に限定しておこなわれるため、自分たちに関わりがある、ないし豆酘地区の赤米という意識は低い。むしろ、他人事のように考えているようにも見受ける。

豆酘小学校は平成１２年度に浅藻小学校と統合、児童は豆酘地区・浅藻地区から通っている。児童数が少ないこともあり、児童は学校内外で家族のように生活している。そのため自分の意見は屈託なく表現できる。しかし、対馬南端に位置し山が多いという地形上、地域外との交流が少ない。そのせいか、初対面の人に対しては尻込みしがちである。

瀬分校は、本校との距離が遠く、赤米に関する情報を持っていない。そのために、赤米についての関心がないと思われる。

＜茎南小児童の実態 ＞

６年生は女子３人が地元の児童、男子３人が宇宙留学生（山村留学：埼玉・岐阜・大阪）で、計６名からなる。全体的に素直でまじめであり、けんかや意見の食い違いもほとんどなく、互いに協力し合ったり助け合ったりすることが自然にできる穏やかで仲の良い学級である。反面、学力への自信のなさと引っ込み思案から、自分の意見や考えを積極的に述べたり大勢の先頭に立ったり（リーダーシップ）は苦手としており、年度当初から学級経営の中心課題として改善につとめた。

前述の実態の改善と少人数のよさを活かすという観点から、道徳や話し合い活動は、座席形態を円座にする形を主にして、自由にものが言える雰囲気（家族的・日常会話的な雰囲気：発問に対するつぶやきも意見として取り上げる）で授業をおこなってきた。結果、価値や主題、議題に対する個々の考えが授業によく反映され、授業そのものを深めることができ、それぞれの自信にもつながってきている。また、事後の自分たちの生活にも学習したことがよく活かされている。加えて、苦手としていた従来の話し合い活動の形態や全校学習のような人数の多い場でも、自分の意見を述べることができる児童も育ってきつつある。

郷土愛・生命尊重の両道徳的価値とも、他の教科・領域等と関連づけて指導を重ねてきている。郷土愛については、総合的な学習で、「茎永・南種子町・種子島の良いところを探そう」というテーマについて調べたり発表したりし、郷土の再認識・再発見をもとに郷土を愛する気持ちを高めてきた。また、地元に伝わる郷土の行事や芸能にもよく参加し、郷土の一員、担い手としての意識や資質が培われてきている。留学生にとっても、南種子を第２のふるさととして受け入れている様子が窺える。生命尊重については、社会科や人権教育と関連させ、年間を通して他者或いは全ての生命への畏敬の念、命やくらしを守り大切にすることの大切さを学習してきており、「生き方」として日常生活の中に活かしている。

多くの児童が、赤米が茎永で大切に継承されていることを知っているが、興味や知識、関わりについてはほとんどない。赤米が校区内で広く栽培されているわけでもなく、普段食しているわけでもないので生活とのつながりが浅い。また、厳かな儀式とともにあること、女子が儀式に参加できないことが、児童を無意識のうちに赤米から遠ざけ、赤米を近くて遠い存在にしている。

＜竹松小児童の実態 ＞

本学級の子ども達は、非常に明るく体を動かして働くことが好きである。また、クラスとしての協力体制も高学年としてのレベルに達していると思われる。学習に関しても、けじめを付けて向かい合う態度が育っており、学習中の発言なども活発である。その反面、やや節度にかける面もあるが、それは子どもらしさの現れでもあろう。

種子島は鉄砲伝来の地であること、対馬は防人・和寇・元寇と関係があることなどを社会科の学習から知っている。しかし、現在の両島の現状や生活についての認識は

乏しい。

大村でも神社などの祭りで赤米が配られているらしく、「見たことがある」とか「食べたことがある」という児童が何人かいた。そこで、実際に赤米を全員で見て、炊いて、食べてみようという学習を１月におこなった。その際、赤米についての話も少々学習している。

(2)資料および主題観

＜授業素材＞

古代から継承されてきた赤米を通して考えることは、日本人の主食について考えることであり、日本における豆酘と茎南の位置や歴史性について手をとりあって授業として体験する意味をもつ。この点に子どもたちの体験を遠隔授業としてつないで一緒に考える意義もある。豆酘と茎南の赤米という共通性は、大村をはじめとする他の地に対しては希有なことである。この事実を際立たせるために大村竹松の子どもたちが見守る意味がある。３地点の遠隔授業は共通性と異質性をそれぞれに、明瞭に意識させるであろう。地域をこえた歴史的・地理的なスケールの中に位置づけられたなかで子どもたちの日常にある郷土を誇りに思う体験をすることは意義深い。

赤米は稲の原種である野生稲の特徴を受け継いでいる古代米の一種で、生命力が強く、荒れ地で無肥料・無農薬でも丈夫に育ち、干ばつ・冷水などにも強い。

野生稲の大部分が赤米であることから、赤米は米のルーツである。赤米が貴重な主食とされていた時代の名残や収穫への感謝から、赤飯のルーツともいわれる。邪馬台国や大和朝廷への献上米も赤米が主だったといわれ、奈良時代の「尾張国正税帳」には赤米を酒の料として皇室へ納めたとある。また、「枕草子」には、「男の片手に其赤き稲の･･･」とあり、井原西鶴の書物にも「赤米」は数多く登場する。その後、明治に入ると赤米は雑草と考えられ、国をあげて赤米駆除運動が始まり、殆ど姿を消した。

岡山県総社の国司神社、対馬の多久頭魂神社、種子島の宝満神社は遠い昔から現在まで赤米を神餞米として守り続けてきた。

豆酘に伝わる赤米行事は、頭仲間と呼ばれる集団が赤米を祭り、栽培する行事である。地域的な特徴を備えた貴重な行事・習俗だが、記録が少なく、最近は伝承の担い手が減りつつあることから、2002年１月18日、文化財審議会により、記録作成などの措置を取るべき無形民俗文化財に指定するよう答申された。

歴史ある赤米を継承する地域は全国に３ヶ所しかなく、豆酘、南種子町はその２カ所である。赤米館という博物館で授業を実施し、赤米継承者にビデオの形で登場していただくことによって、自分たちの地域の誇りを子どもたちに伝えたい。伝承は人の営みの継続であり、郷土の先人の生き方として歴史が存在するようすを子を子どもたちに感じ取ってもらえればありがたい。小学校高学年における歴史性に由来する畏敬の念は人の思いへの感嘆として感じとってもらえればありがたいと思う。

＜主題と学習指導要領＞

1958年（昭和33年）に特設された「道徳の時間」が教育課程に位置づけられた後、昭和43年、昭和52年、平成元年、平成11年と４回の学習指導要領の改訂がなされた。

この間、道徳教育に関する基本的な考え方、つまり、人間尊重の精神を道徳教育の基本理念とする考え方は大きく変わっていない。

1989年（平成元年）改訂では、さらにこの精神の一層の深化を図るべく、新たに「生命に対する畏敬の念」が道徳教育の目標に加わった。「生命に対する畏敬の念は、人間存在そのものあるいは生命そのものの意味を深く問うときに求められる基本的精神であり、生命のかけがえのなさや大切さに気づき、生命あるものを慈しみ、畏れ、敬い、尊ぶことを意味する。このことによって、自他の生命の尊さや生きることのすばらしさの自覚を深めることができる。また、ここでいう生命は、人間のみではなく、すべての生命を含んでいる。そのことによって、人間の生命が、あらゆる生命との関係や、調和の中で存在することを自覚させ、生命あるものすべてに対する感謝の念や、それらを通して豊かな心を一層育てることができる。したがって、人間尊重の精神は、生命に対する畏敬の念が目標に加わることによって、さらに深まりと広がりをもってとらえられるのである。今日問題化している自然環境の悪化や子どもの自殺やいじめ、非行などを考えるとき、このことが、より重視されなければならないのである。」とある。

また、平成11年改訂では、「生命に対する畏敬の念」について「生命に対する畏敬の念は、人間存在そのものあるいは生命そのものの意味を深く問うときに求められる基本的精神であり、生命のかけがえのなさや大切さに気づき、生命あるものを慈しみ、畏れ、敬い、尊ぶことを意味する。このことによって、自他の生命の尊さや生きることのすばらしさの自覚を深めることができる。また、ここでいう生命は、人間のみではなく、すべての生命を含んでいる。生命に対する畏敬の念に根ざした人間尊重の精神を培うことによって、人間の生命が、あらゆる生命との関係や調和の中で存在し生かされていることを自覚できる。そして更に、生命あるものすべてに対する感謝の心や思いやりの心をはぐくみ、より深く自己を見つめながら、人間としての在り方や生き方の自覚を深めていくことができる。子どもの自殺やいじめの問題、環境の問題などを考えるとき、このことが一層重要になる。」と明記され、新たに「人間としての在り方生き方」が加えられている。

したがって、平成11年改訂版学習指導要領においては「生命に対する畏敬の念」と「人間の在り方生き方」が強調されていると言える。

この2点を考慮し本授業のねらいを、赤米を継承してきた人々の生き方を知り、互いのよさを話し合うことにより、郷土の文化や伝統を大切にしようとする心情を育てるとともに、自己の生き方を見つめ直しよりよく生きようとする態度を養うこと、とした。授業で使われる素材に込められたよさを自分との関わりで、高学年の場合自分の在り方生き方にできるだけつながる形でとらえなおすところに道徳授業の意味がある。

このねらいに関連する5・6年の指導内容は次の通りである。

4．主として集団や社会とのかかわりに関すること

(7)郷土や我が国の文化と伝統を大切にし、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもつ。

この段階においては、郷土を愛する心が日本全体に開かれたものへと発展し、国を愛する心が児童の内面から自覚されることが大切である。そのためには、郷土や我が国の発展に尽くし文化や伝統を育てた先人の努力を知り、自分もまたそれを継承し発展させていくべき責務があることを自覚し、そのために努めようとする心構えを育てる必要がある。

3．主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること

(3)美しいものに感動する心や人間の力を越えたものに対する畏敬の念をもつ。

この段階においては、人間のもつ心の崇高さや偉大さに感動したり、真理を求める姿や自分の可能性に挑戦する人間の姿に心を打たれたり、芸術作品の内に秘められた人間の業を越えたものに感じたり、自然の摂理に感動しそれを包み込む大いなるものに気付いたりすることなどを通して、それらに畏敬の念を持つことが求められる。そして、人間としての在り方をより深いところから見つめ直すことができるように指導することが大切である。

3．主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること

(2)生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する。

この段階においては、生命の誕生から死に至るまでの過程を理解することができる。それらを通して、生命のかけがえのなさを自覚できるようにすることが重要である。そして、人間の誕生の喜びや死の重さ、生きることの尊さを知ることから、自他の生命を尊重し力強く生きぬこうとする心を育てるとともに、生命に対する畏敬の念を育てることが大切である。

＜1時間複数価値＞

道徳授業において自己をふりかえることは必要である。郷土愛で自己をふりかえるとき、歴史性のある資料であること、高学年であること、今日の学習指導要領の強調点ということから考えると、人間としての在り方生き方につなぐ必然性がある。

先人の努力を知り、自分がどうするであろうかと考えることを授業の中心に据え、日常の歴史に潜む偉大さへの畏敬の念をもち、どのように生きていくか見つめ直し、広い視野で、力強く生きていこうと思うことを重要視したい。郷土愛も人間としての在り方生き方につながっており、畏敬の念と生命尊重を組み合わせることにより、さらに両方の価値の深まりが見られるものと思われる。そこで郷土愛を中心価値とし、畏敬の念と生命尊重を組み合わせた1時間複数価値の授業とする。郷土愛が主な価値であるか、なぜ郷土愛かと考えれば畏敬すべきよさがあるからであり、郷土愛の方向としては、自己の在り方生き方としての生命尊重に行きつくからである。

本授業を通底する道徳上の価値は郷土愛であるが、畏敬の念に支えられた驚きに始まり、生き方あり方として自己へのふりかえりを展開の最後に設定した。このような複数価値への目配りによって、価値が現実的な連関と深まりをもつと考える。

(3)指導観

＜主題説明＞

主題の「今　ここに　わたし」は、場所としての「ここで」に止まらず、ここにい

る「わたし」を見つめ直すことにより、生活の背景に目を向け、今私が存在するかけがえのなさを浮き彫りにしたいと考えたことによる。継承者は自分のこと（世代）だけを考えて生きているのではない。地域の在り方をつないできた「人」に焦点を当てることにより、現にそこにいる５・６年生なりの自分の生き方在り方に思いを致すようにしたい。

豆酘、南種子町の２地区において、赤米の取り組みや継承のしかたは違う。その違いから互いのよさに目を向け、継承してきた人々の取り組みや継承してきた理由、苦労を知り、人の生き方を通して、自分の生き方を見つめ直す機会としたい。

＜授業展開＞

導入段階で、３校いっしょに挨拶を交わし、短時間で展開に入る。

展開段階を本授業では３つに構成した。授業は早速、授業素材である赤米の実物を提示するところから始め、子どもたちの感想を聞く。その際、長い間継承されてきた赤米の貴重さ、歴史の深さへの感動に焦点をあて、赤米に関わらない第３者竹松小の視点を介してより深く思いを致すことができるようにする。この経過により、実態の違う各校の子どもたちが共通の授業素材を受け止める基盤ができるものと思われる。

ビデオで継承者の話を視聴することによって、人に焦点をあて、赤米との関わりや思いを知らせたい。ビデオ視聴の感想を

① 継承されてきた赤米の意味

② 継承する人

③ 赤米の将来

という３つの視点に分類することによって、各グループでの話し合いのテーマにしたい。相手校とのペアグループを携帯電話でつなぎ、上記の３つのうち１つのテーマについて意見を交換してもらう。グループ編成は授業前に実施されたグループエンカウンターと同じである。グループエンカウンターで繋がりのできたグループにより、話し合いが活発になるだろう。異なる地域の子ども同士同一のグループをつくり、個と個を結ぶ携帯電話によりそれぞれ交流することは、違う視点で郷土をふりかえることから価値観の多様化が期待される。

道徳授業として重要な自己を振りふりかえる過程として、中心価値である郷土愛を焦点化し赤米と自分の関係を考えさせることにより、自分の在り方生き方の方向につなげたい。

終末段階において、価値の一般化への視点を持つとともに、他者による評価を聞く。他者の評価とは第三者評価である。豆酘、茎南における自分たちの共通性が、他である竹松に対しては異質性になる。竹松小の子どもたちの評価を聞くことによって二者関係にとどまらない広がりを見せ、公共への意識を育てる場になり得る。

＜３校と個を生かす＞

授業全体を通して、今までに交流のない３地点を結ぶこと、赤米に対する思いを語る継承者とかかわること、個人からグループ、さらに全体へとコミュニケーションを拡大していくことは視野を広げ、感覚を新たにし、豊かな心を形成するうえでも重要

である。さまざまなかかわりを通して、人間としての在り方を自覚し、よりよい生き方を求めていくという視点から道徳遠隔授業の意義は大きい。

また、指導する道徳授業、体のいい説教としての道徳授業ではなく、子どもたちのつぶやきを生かし、子どもたちの声に耳を傾ける授業、つまりカウンセリングマインドを持った道徳授業を目指す。

(4)グループエンカウンター

グループエンカウンターについて、次のように考える。

＜定義＞

グループエンカウンターは集中的グループ経験の１技法であり、来談者中心療法の祖でもあるRogers,C.R.が創始した。グループエンカウンターは、経験の過程を通して、個人の成長、個人間のコミュニケーションおよび対人関係の発展と改善の促進を強調するものである（Rogers,1982）。

これを林（1990）は、「①人工的な小集団（通常、８~１２人の小グループ）の基本的な場において、②来談者中心的な立場の集団リーダー（ファシリテーターと呼ばれる。１人~数人）を含めたメンバー間の相互作用を媒介として、③核メンバーの精神的成長（パーソナリティの健全化および成長、個人的な病みや問題行動の解決、改善）の促進を目的とするグループ・アプローチである」と明確に定義しており、この定義が具体的にグループエンカウンターの目的を表現していると思われる。

＜目的と意義＞

上に述べたようにグループエンカウンターの目的は「個人の成長と個人間のコミュニケーションおよび対人関係の発展と改善」であるが、このエンカウンターのおこない方には２通りある。一つは非構成的グループを用いたエンカウンターであり、もう１つは構成的グループを用いたエンカウンターである。非構成的グループとは、課題、役割、内容、方法、すべてを参加者がその場で決めておこなうものであり、メンバーが動かなければ何事もおこらない、すなわち沈黙にさえ意味があるという主張がある。それに対して構成的グループはファシリテーターが主導権をとって対象・グループ・エクササイズ・時間をセッティングして、課題を与えエクササイズをおこなうグループであり、短期間にリレーションがつくられる利点がある。

［構成的グループの６つの体験と６つのねらい］（國分，1981）

（体験）	（ねらい）
・自分の本音を知る	・自己理解
・自分の本音を表現する	・自己開示
・自分の本音を主張する	・自己主張
・他者の本音を受け入れる	・他者受容（=傾聴訓練）
・他者の行動の一貫性を信じる	・信頼体験
・他者との関わりを持つ	・役割遂行

通常、エンカウンターはファシリテーターとグループが同じ空間・同じ場所に存在し、そのなかで目的を果たすべくエクササイズがおこなわれる。今回の遠隔授業では、ファシリテーターと茎南、豆酘両方のグループがそれぞれ別の場所に存在しながら同時にエクササイズをおこなっていく形になり、こうした遠隔でのエンカウンターの可能性を探る意義がある。なお、今回は時間が限られているため、短時間にリレーションをつけることができる利点をもつ構成的グループエンカウンターの技法を用いる。

今回の遠隔でのグループエンカウンターの目的は次の二点に絞られよう。

・遠隔でグループエンカウンターが成立しうるのかどうかの可能性を探る。

・道徳授業とグループエンカウンターを結びつける１つの形を提示することになる。

(5)技術的な意義

多くの島嶼部や山間部を抱える長崎県では、地理的な障害による情報格差を克服することは、地域の活性化、過疎化に対する歯止めといった点で非常に重要な課題である。学校教育や社会教育の分野においても、遠隔地間での情報交換による教育活動の活性化が望まれている。このような状況の中、本実験は、近い将来実現されるであろうブロードバンドネットワーク環境における授業実践への布石としての意義が大きい。

現在でも、インターネットを用いたマルチメディア双方向コミュニケーション技術は実用化に近づいてきている。商品開発も進んできており、実際に英会話教室や通信講座の分野では導入が始まっている。これらのシステムの特徴は、知識や技術を教師から生徒に対して伝達するということに特化されている点にある。これに対して、われわれは授業の重要な要素である子ども同士のコミュニケーションに重点を置き、遠隔地での対話の促進を目的とするシステム構築をねらった。この点が従来のものとは異なっている。また、道徳教育を扱った遠隔授業の事例は少なく、今回の実践は新規性と話題性のあるものとなっている。

われわれはこれまで、長崎-神戸-シーボルト記念館、五島-国見、長崎-福岡、などを結んだ遠隔授業実践をおこなってきている。これらの知見を踏まえ、今回のシステムの特徴として次の点を挙げることができる。

①多地点接続のシステムである。

赤米という接点のある茎南小(種子島)と豆酘小(対馬)を結ぶと同時に、赤米とは接点のない竹松小(大村)も加える多地点接続のシステムである。このことは、素材が自らの地域にない学校での学習を可能にするとともに、素材をもつ学校でも第三者の目を通した情報の捉え直しが可能になることを意味する。

3 地点間の動画像の通信は、マルチキャスト技術を用いることで効率よくおこなうことが可能である。

②携帯電話を用いた個のコミュニケーションを重視したシステムである。

これまでの遠隔授業では、遠隔地との意見交換という意味あいが大きかった。しかしながら、今回の授業では、通信技術を使って遠隔地間の生徒同士でグループを組むという試みをおこなう。これまでのシステムでは、教室全体の画像と教室一杯に聞こえる音声、一度に一人しか話すことのできないマイクといった構成でおこなわれてきた。このようなシステムでは、上記の試みを実現することができない。本授業では、携帯電話を

用いることで、大勢の中にあっても個のコミュニケーションをおこない、上記の試みを実現する。次世代携帯電話のインフラが整備された環境においては、音声だけでなく動画像も用いた個のコミュニケーションが実現される。

③複数の提示画面を用い、臨場感の向上を目的としたシステムである。

複数の提示画面を用い、授業を制御する教師の画像と生徒間のコミュニケーションや授業の臨場感・参加意識に大きく寄与する生徒の画像を常に映しておく。このために、音声系と教師画像系、生徒画像系の通信路(ISDN)を独立にもたせる。特に、生徒画像系の通信には帯域を全て割り当て、臨場感の向上を図る。

(6)評価

道徳遠隔授業の評価を道徳授業、グループエンカウンター、技術面の３つの点で実施する。

・道徳授業は、子どもの発表、ワークシート、連想調査により評価する。なお、連想調査は、グループエンカウンター前、授業前、授業後の３回実施する。すでに比較のために、１月 29 日以前に１度、連想調査を実施してある。
・グループエンカウンターは子どもたちの様子、ふりかえりシートにより評価する。
・技術面の評価は、授業終了後、調査用紙により実施する。

３．赤米でつなぐ道徳遠隔授業展開案

(1)ねらい

赤米を継承してきた人の生き方を知り、それぞれの郷土のよさを話し合うことにより、伝統ある文化とともにある生活を大切にしようとする心情を育てるとともに、自己の生き方を見つめ、よりよく生きようとする態度を養う。

（2）展開

	学習活動	教師の支援・援助	スタッフの支援・援助 大村	茎南	豆酘
導入	1．授業の趣旨や授業形態を知る。 2分	○今日は、鹿児島県の種子島にある茎南小学校と長崎県の対馬にある豆酘小学校・瀬分校、それに同じく長崎県の大村市にある竹松小学校の3校をインターネットで結んで道徳の勉強をします。 みんな大きな声で挨拶をしましょう。 「こんにちは」だよ。さんハイ・・・。	司会	全体	全体
	＜赤米＞ 2．赤米と出会う。 8分	○みなさんに赤米をプレゼントします。この赤米は種子島で収穫された物です。豆酘の赤米は門外不出、つまり誰にも差し上げていないということで、持ってこれませんでした。種子島の赤米ももとの種籾は外に出していません。そうやって、どこも大事に守ってきたんだよね。 ※各グループに両方の赤米を配布する。 50mlビーカー（皿）を各グループに用意する。 ・（赤米のすごさ）日本の3カ所でしか赤米が継承されていないことや、古代米であることを知らせる。豆酘では、国の無形民俗文化財にしていされることが決まったこと、南種子では赤米館をつくっていること。 ・（郷土の誇り）今回種子島と対馬を結んで授業をやる意義を知らせる。	地図 司会		
	豆酘、茎南、それぞれの画像を2枚ずつ映す。	○それぞれの地域の赤米の紹介をしてもらいます。 まず、豆酘のみなさんから赤米について体験したことを紹介してもらいましょう。 次に茎南のみなさんに赤米館について紹介してもらいます。		全体 ↓ 発表者と画像 ↓	発表者と画像 ↓ 全体 ↓

		（それぞれ画像を含めて３分程度で紹介） ○竹松のみんなは赤米を見たり先生の話や豆酘小や茎南小の友だちの話を聞いたりしてどんな感想を持ちましたか。 ※竹小児童２名程度 ・どんな人たちが伝えてきたのだろう ・どんな苦労があるのだろう ・赤米館ってすごいなぁ。 ・実際に田植えをしていて･･･ ※（第３者の眼による確認）赤米の継承地ではない竹松小の子どもの意見を聞くことにより、豆酘、茎南の子どもたちにとって身近にある赤米が日本全体にとって貴重であることを再認識させる。	発表者	全体	全体
展	＜人＞ ３．対馬・種子島地区のビデオを視聴する。　１０分 ↓ ４．ビデオを見ての感想を発表する。 ９分	・豆酘・南種子それぞれに赤米を伝えてきた人のインタビュービデオを用意しました。 ・まず種子島のビデオを見てみましょう。 ※司会者が継承者紹介後に、「お願いします」のかけ声でビデオを流す。 ※ビデオは各学校のテレビで視聴。 ・次に豆酘のビデオを見ましょう。 ※出演者の紹介後にビデオ ※ビデオは各学校のテレビで視聴。 ○両地区のビデオを見ての感想を発表してもらいましょう。 ・それぞれの学校から３人お願いします。 ・まず豆酘小から、次に茎南小という具合に代わる代わるお願いします。 ※これを３回繰り返す。	総合司会	全体 全体 ↓ 発表者 ↓ 全体 ↓ 発表者	全体 発表者 ↓ 全体 ↓ 発表者 ↓ 全体

開		※予めグループエンカウンターで組んだ各グループから代表者が発表するが、各学校の担任で児童を指名する。その際、同じ子どもに指名が偏よることなくできるだけたくさんの子どもに発言のチャンスを与える。 （授業終了までに全員発言をめざす。） ※感想を ①継承されている赤米の意味 ②継承している人 ③赤米の将来に分類しながらまとめる。	司会	↓ 全体 ↓ 発表者 ↓ 全体 ↓ 全体	↓ 発表者 ↓ 全体 ↓ 全体
	＜将来＞	・①継承されている赤米の意味②継承している人についての感想がありましたね。 でも、大村をはじめほとんどの地域では赤米は身近ではないし、赤米がなくても別に生活には困らないのじゃないかな。どう思いますか？ ※赤米を継承することが本当に素晴らしいことなのか揺さぶりをかける。 ※将来赤米がどうなって欲しいのか、また自分はどう関わりたいのかということに対する補助発問でもある。			
展	＜自分との関わり＞ 5．3つの視点を基に赤米に対する自分の思いを携帯電話を媒介として伝え、お互いのグループで話し合う。　　２０分	○では、これから携帯電話を使って①継承されている赤米の意味②継承している人③赤米の将来について、相手の学校のペアのグループと意見交換をします。（まず、テーマを決めてからお互いの考えを伝え合いましょう。その後に質問や話し合いをしてくださいね。最後に、各グループの代表の人がこんな事を話し合いましたって紹介してください。）			

開		さあ、電話をかけましょう。　１０分間 ※メモ用紙は事前配布。 ・では，話し合った内容を紹介してもらいましょう。 ※各グループごとに発表し、他の人が付け加えるという形をとる。 ※各班の代表で発言する児童は自分達で決める。順番はＡ→Ｆ	司会	ｸﾞﾙｰﾌﾟ ↓ 全体 ～ この方法で Ａ→Ｆ 全体	全体 ↓ ｸﾞﾙｰﾌﾟ ～ 全体
展 開	６．３つの視点をもとにしながら、赤米と自分がどのような関わりが持てるかを考える。 ８分	◎みなさん一人ひとりは赤米とどのように関わっていきたいと考えますか。記入用紙に考えを書いてください。 記入５分間 ・では、書いたことを読んでもらいます。 ・各学校からら○名お願いします。 ※ここで時間の調整するので、人数は当日指示する。 ※子どもたちが大人になるぐらいの将来を考えさせたい。 ※自分のこれからの自分の生き方という視点で考えさせる。 ※記入用紙は，事前配布。	↓	↓ 全体 ↓ 発表者 ↓ 全体 ↓ 発表者 ↓ 全体	全体 ↓ 発表者 ↓ 全体 ↓ 発表者 ↓ 全体
終 末	７．竹松小の子どもの感想を聞く。 ３分	○赤米について、茎南小と豆酘小の皆さんに話し合ってもらいましたが。それを見ていた竹松のみんなはどんな感想を持ちましたか。 ※２～３人発表してください。 ・これから先、皆さんは、どこにいても自分だ育ったふるさとや、自分が過ごしたことのある場所との関係はずっと残るはずです。 自分と対馬、種子島、大村とどんな関係をもって生きていくのか、これからも考えてみてください。	司会 ↓ 発表者 ↓ 司会	全体	全体

4　グループエンカウンター計画

グループエンカウンターの〈定義〉ならびに〈目的と意義〉については、Ⅱ赤米でつなぐ道徳遠隔授業指導案、２．主題観、（４）グループエンカウンターにおいて述べた。ここでは、グループエンカウンターの際におこなうエクササイズについて、紹介ゲーム、自己紹介カードを含めて紹介する。

エクササイズ

（１）　紹介ゲーム

［ねらい］別々の学校の児童同士、交流を図りながら、「伝え合い」「認め合い」「共に生きる」子ども達を育てる。ゲーム感覚で楽しくお互いのことを知ることを目的とした活動とする。

３人ないし４人のグループをつくる

そのグループ内で役割を決め交代で携帯電話を使って話をする。

（一番最初に話す人）

- 「私は○○色の服を着ています」
- 「私の髪型は○○です」
- 「私は○○に似ています」　　など

答えが分かったら、その他のメンバーもそれぞれ自己紹介をする。始めの人から

「○○さんの隣の○○です」「○○さんの隣の○○さんの隣の○○です」…

自己紹介の内容はあらかじめ決めておく

（内容例）

兄弟：

好きな食べ物：

好きなスポーツ：

将来の夢：

※このとき、黒板等に相手学級児童の個別写真（名前付き）を探して持ってくることにより、相手への認識が深まると考える。「画面でははっきり顔が見えないけれども、今話している○○さんはこんな人なんだ～」

（２）　エクササイズ展開案

時間	教師の指示	留意点	カメラ位置
1分	〔インストラクション〕 ●初めて会う人とお話をする時ドキする人は多いでしょう。今日は、少しでも多くの人とお話ができるように紹介ゲームをします。		大　村：内野 種子島： 対　馬：
5分	〔エクササイズ1〕 ●あらかじめつくっておいた3人ないし4人のグループの中で番号を決めておき、それにそって役割を交代します。	役割分担とその順番を記入した表を画面に提示する。	

	で番号を決めておき、それにそって役割を交代します。 ・電話で話す役 ・紹介カードに記入する役 ・紹介カードを探してくる役 ・プロデューサー 順番はこの表を見てください。まず1回目は①番の人が“電話で話す役”、②番の人が“記入する役”、③番の人が“カードを探してくる役”、④番の人が“プロデューサー”です。 ●1 回目に話す人は、最初は自分の名前を言ってはいけません。「こんにちは」とお互いに挨拶をした後に「私は髪が長いです」「私は背が高いです」「私は前の方にいます」など自分の特徴や位置を説明しながら、お互いにどこにいるのか探してください。分からない時には「両手をあげて」「髪をさわって」「ジャンプして」など指示を出して探してもいいです。相手のグループがどこにいるのか分かったら、そこで自己紹介をします。相手の名前が分かったら、カードを探してくる役の人は探しに行ってください。そしてカードが来たら電話で話す役の人が紹介カードの項目に沿って交代交代に質問をしてお互いの話している内容を記入する約の人に伝えて記入してもらってください。1 回目の人の紹介が終わったら2回目に入ります。2回目は表に書いてある順番に役割を交代してください。3回目も同様です。2回目以降は、自己紹介から始めてください。	する。 ※3人グループではプロデューサーは“紹介カードに記入をする人”と“紹介カードを持ってくる人”が兼ねる。 どういうふうにお互いの位置を確認していくか、相手への質問の仕方について具体的に例をあげて説明する。	大　村：内野 種子島、対馬：役割順番の表
	●どんなふうにするかやってみますね。(デモンストレーション) A:(携帯電話を手にして)「こんにちは」 B:「こんにちは」 A:「どのへんにいますか」 B:「後ろの方にいます。あなたはどんな感じの人ですか。」 A:「私は○色の服を着てカメラの前にいます。手を振ってください」 B:(手を振る) A:「良く見えませんね。ジャンプしてください。」 B:(ジャンプ) A:「ああ、分かりました」 B:「私も分かりました。こんにちは、Bです。」 A:「こんにちは。Aです。」←ここで紹介カードを提示	デモンストレーションは2地点の画面を使って必ず行う。	大　村：内野 山本 種子島：全体 対　馬：全体

	「Bさんは何人兄弟ですか。」 B:「○人兄弟です。弟が○人います。Aさんは何人兄弟ですか。」 A:「○人兄弟です。妹が○人います。」 このようにしていきます。 記入し終わった紹介カードは、各グループに用意されている画板に相手のグループの人全員分が貼れるように左上から順番にきれいに貼っていってください。 時間は15分です。 ●時間が余ったグループは、紹介カードの一番下のその他の項目があるので、何か一つずつ相手の人に聞きたいことを質問していいです。例えば「ペットを飼ってますか」とか「趣味はなんですか」とか「どんなタイプの人が好きですか」とかね。みんなの質問が終わって、時間が余ったら聞いてみてください。それでは活動を始めてください。 －活動中－ 15 分経ちました。みなさん、お互いの紹介は終わりましたか？	画板に紹介カードをすぐに貼れるように セロテープ、画鋲などの準備をしておく。 3人の班と4人の班があるので、終了時間のずれに配慮する。	大村：役割順番の表 種子島：全体 対　馬：全体
15分	〔エクササイズ2〕 今それぞれのグループの前には、今お話をしたグループの人たちの紹介カードが貼った画板がありますね。今日はできるだけたくさんの人の名前を覚えて知り合いになりたいので、今から各グループに2分ずつ画板をまわしていきます。いいですか。	エクササイズの目的の再確認をする。	大　村：内野 種子島：全体 対　馬：全体
12分	自分と似ている人がいるかなあ、この人とお話してみたいなあなど、考えながら見ていってください。後で感想を聞きます。 終わりましたか？ 今、グループごとに自己紹介をして、それから相手の学校のみんなの紹介カードを見たのですが、どんな気持ちがするでしょう？グループの人と話し合ってください。 それでは誰か感想を聞かせてください。	携帯電話は切る。	種子島：全体 対　馬：全体 種子島：全体 対　馬：全体

1) 遠隔道徳授業の実現

学校教育における授業の一形態としての遠隔授業の有効性を検討する。今回は、遠隔授業が難しいと言われる道徳の授業を取り上げ、複数小学校間を接続して子ども同士による同時双方向の活発なコミュニケーションを実現する。そして、心情に深く訴えかけ、心を見つめる授業を展開する。

2) 題材「赤米」と郷土愛

古来より神事として赤米作りを継承しているのは日本で3地点しかない。そのうちの2地点、対馬豆酘と種子島茎永を結ぶことによって、日本人の食のルーツである赤米(古代米)を素材にし、郷土を愛する心を扱う授業の実現を目指す。

3) 多地点接続の遠隔授業

通常2地点間でしか行われない双方向通信を、3地点間で行う。そして、多地点接続の遠隔授業の支援方法について、有用性と問題点を明らかにする。

4) 携帯電話によるグループ別遠隔交流の実現

児童数人のグループを携帯電話によってつなぐコミュニケーション支援方法の確立を目指す。今回の授業では、円滑なコミュニケーションのための支援方法として、臨床心理士による「グループ・エンカウンター」を授業に適用し、その有効性を検証する。

(2)意義

1) 遠隔交流の活性化

多くの離島を抱える長崎県では、物理的な距離の隔たりによる情報格差の是正は重要な課題である。教育においても、遠隔地間での教育情報交換や教育活動の活性化が望まれている。今回の実践事例を基に、将来的には、大容量の回線を使った授業実践へと発展する可能性がある。

2) 多地点間の遠隔教育

インターネット上での双方向コミュニケーション技術は実用化に近づいている。近年行った2地点間の遠隔授業「長崎－神戸－シーボルト記念館遠隔授業実験」や「長崎－福岡間道徳科遠隔授業」の成果を元に、3地点間での双方向遠隔授業を行う。多地点接続装置を利用した道徳遠隔授業の事例は少なく、新規性と話題性のある実験となる。また、多地点接続による授業の利点と問題点を示す点でも意義がある。

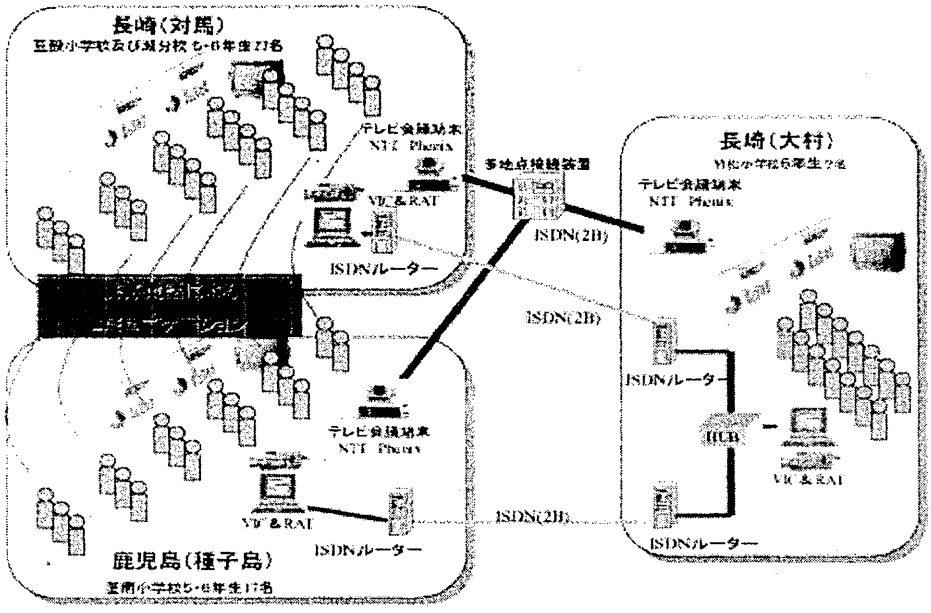
3) グループ別遠隔交流を取り入れた授業

携帯電話を用いてグループごとのコミュニケーションを支援する遠隔授業の実践例はない。遠隔授業における新しい授業形態の提案につながるとともに、将来的には、個別交流支援における携帯端末での双方向通信技術を利用した教育、 データベースと連携したグループウェアの開発など、新たなシーズの開拓に発展する可能性がある。

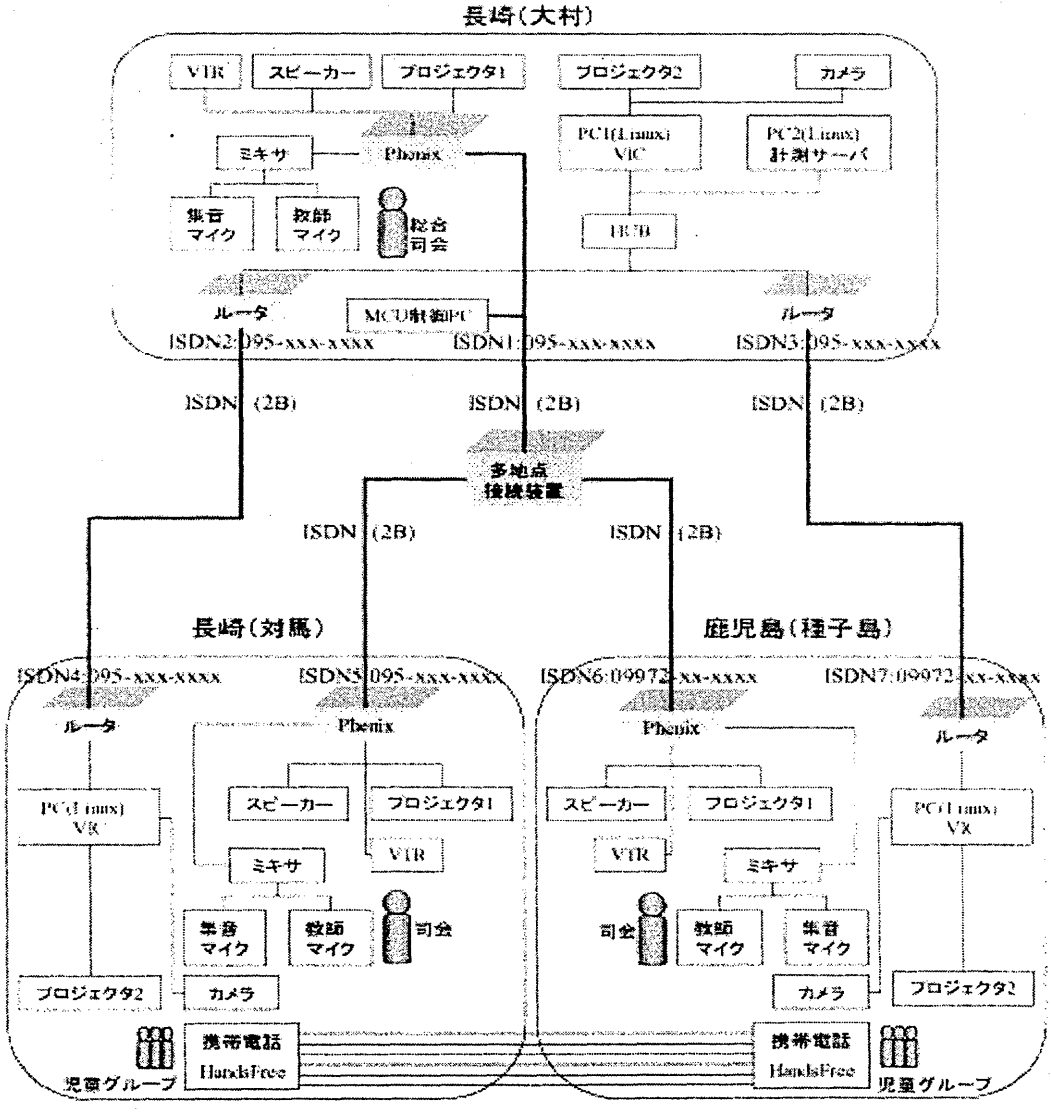
(3)遠隔授業の概要

長崎県内の1小学校と離島の2小学校を ISDN ネットワークで接続し、多地点接続装置と IP マルチキャスト技術を用いた音声・映像の転送を行い、3地点間での遠隔授業を試みる。具体的には、大村市立竹松小学校(長崎)と、厳原町立豆酘小学校(対馬)並びに南種子町赤米館(種子島)に TV 会議システムとビデオカメラ・マイクを接続したパーソナルコンピュータを持ち込み、3校の児童をネットワークで結んだ授業を展開する。また、授業中に、携帯電話を用いて児童が直接対話できる環境を構築する。

遠隔授業の概念図



遠隔授業のシステム構成図



註

(1)　「長崎県今里中学校－鶏知を結んだ授業」については以下の論文がある：藤木、糸瀬、糸山、テレビ会議システムを用いた授業の実践と授業研究の試行、信学技報 ET97-33、1997。「長崎-神戸-シーボルト記念館を結んだ遠隔授業実験」：岡村、鶴、藤木、中村（千）、池永、インターネットを利用した遠隔授業の実用化に関する研究、教育システム情報学会誌 Vol.14 No.3、1997。「五島（奥浦）－国見（土黒）を結んだ道徳遠隔授業」：藤木、鶴、池永、中村（千）、蒲原、黒田、小学校道徳における ISDN と PHS を用いた遠隔授業の実践と評価、教育システム情報学会誌 Vol.15 No.4、1999。「奥浦（長崎）－姫治（福岡）間の道徳遠隔授業」：上薗、増田、山本、森永、郷土を見つめる道徳遠隔授業、道徳教育方法研究第 6 号、2000 年。藤木、里、上薗、山本、増田、２画面を利用した小学校道徳における遠隔授業の実践と評価、長崎大学教育学部附属教育実践研究指導センター紀要第 2 号、2000 年。上薗、増田、米倉、森永、山本、藤木、郷土を見つめる道徳遠隔授業の意義、長崎大学教育学部附属教育実践研究指導センター紀要第 2 号、2000 年。

(2) ふりかえり用紙として、次のものを使った。

ふりかえり用紙

① 今日の「私はだれでしょうゲーム」は楽しかったですか？

はい　・　どちらでもない　・　いいえ

② 携帯電話を使って、たくさんのお友達と話ができましたか？

はい　・　まあまあ　・　いいえ

（　　）人の人と話ができた。

③ お友達のことを知ることができましたか？

はい　・　まあまあ　・　いいえ

④ このようなゲームをまたしたいですか？

はい　・　どちらでもよい　・　いいえ

⑤ 今日のゲームで感じたことや思ったことを自由に書きましょう。